

Komisarjevsky, Theodore

The costume of the theatre.

New York, Benjamin Blom, 1968 (1932) (文献番号5-139)

コミサルジェフスキー著

舞台衣裳

本書は舞台衣裳史に関する小論を述べており、読者の対象を舞台関係者にとどめず、演劇にかかわりのない人々にも興味を起させ、楽しめるよう配慮されている。内容は、1.服装と人間 2.ギリシア演劇 3.ローマ演劇 4.奇跡劇と教訓劇 5.シェイクスピアの時代 6.17世紀 7.17世紀における“コメディア デラルテ”と喜劇衣裳 8.18世紀 9.19世紀 10.20世紀、である。第1章「服装と人間」では、服装の変遷及び舞台衣裳の起源と基本的な事象などを概観している。第2章以下は時代別に構成されており、各時代に上演された演劇とその衣裳、演劇の特質、舞台装置や俳優の演技、また舞台衣裳に影響を与えた国や人々などについても演劇史に基づいて解説してある。著者テオドール=コミサルジェフスキー（1882-?）は、ロシア生まれのイギリスの演出家で、ロシアの名女優 ヴェラ=コミサルジェフスキーの弟である。姉ヴェラはスタニスラフスキーの設立した「芸術文学協会」で俳優としての指導を受け、招かれて帝室アレクサンドリンスキー劇場の専属女優となった。チェーホフ、イブセン、ゴーリキーなどの作品に登場する、時代の重圧にあえぐ悲劇の女性役を得意とし、民主的観客の支持を得たが、その民主的理想や芸術的意欲が帝室劇では満たされないことを認め、1904年ペテルスブルク（今のレニングラード）に自分の劇場を作った。著者は姉の劇場をはじめ、モスクワの諸劇場で戯曲や歌劇の演出に携わっており、革命後、亡命してロンドン、パリ、ニューヨークで演出を行い、のちにはアメリカに居住した。彼の一家は芸術家であり、父フョードルも歌手で、ペテルスブルクの帝室劇場でロシア歌劇の主演を演じている。のちモスクワ音楽学校教授となり、また「芸術文学協会」の設立にも参加した。本書はこの父を記念して書かれている。20世紀初頭、ロシアの演出家で俳優でもあるスタニスラフスキーが提唱した舞台芸術の創造に関する理論は、リアリズム演劇の確立をめざして生まれたもので、世界の演劇界に広く影響を与えた。著者はこのスタニスラフスキー・システムを批判的にとらえており、主著“The actor and theory of Stanislavsky”の中にもそれが現われている。序文において彼は「この世の人誰もが、俳優のように気取って歩く。男も女も、とりわけ後者は自分を装う時、〈モード〉という限りない関心と芝居じみたあこが（憧）れや才能を大いに表わすものである。今や何世紀もの間、女性は、ファッション・デザイナーによりつくられてきている。彼らは〈演技する〉という人間の弱味を巧妙に利用し、彼らの壮観な見せ物で、この世の人々を多くの役者として取り扱うという演出家の役を彼ら自身が演じている。」と述べて演出家の目で〈モード〉をとらえているのは興味深い。